固定観念 男から挑む

Wの未来

1面連載「Wの未来　俺に任せろ」は女性がより輝くためにオトコ社会を自ら変える男性たちを追っている。部下の育児にも気を配る「イクボス」や性別にとらわれない美容部員……。従来の固定観念に挑む男性はまだまだいる。

育児両立、ボスが先導

三井物産ロジスティクス・パートナーズで社長を務める川島高之さん（50）は、繁忙期以外は午後6時すぎには会社を出る。得意先との宴会がなければ、自宅に直帰し、家族の夕飯は自ら作る。理事を務めるNPO法人ファザーリング・ジャパンや地域活動に仕事後の時間を割くことも多い。

三井物産の商社マンだった。17年前の息子の誕生が家庭を顧みる契機になった。妻もフルタイムで働いており、家事・育児を分担しなければ、どちらかが仕事を続けられなくなる。なにより息子はかわいかった。「1秒でも長く一緒にいたかった」。総合商社勤務では付きものの海外転勤を希望しなくなり、それから家庭生活との両立を重視して働いてきた。

今なら「イクメン」でも当時はまれな存在。同僚の支持が得られるよう、権利を振りかざさず、仕事で成果を出し続ける努力をした。10年ほど前に管理職になってからは部下の働き方にも気を配ってきた。まさに「イクボス」のはしりだ。

厚生労働省がイクボスの条件に挙げるのは①部下の子育てと仕事の両立に配慮②業務効率向上のために工夫③自分も仕事と生活を充実させている――の3点。川島さんはさらに子育てだけに限定しない。NPO法人理事として週末に始めた全国での講演でも、そう伝授する。

育児支援は「私生活」のひとつと位置づける。日本の企業風土では私生活の優先を良しとしないことも多い。川島さんは「私生活のために休みを自然体で取れる組織にすることこそボスの役割」と思っている。

育児で職場を離れがちな人がいると、周囲の人に仕事のしわ寄せが行きやすい。育児だけに限って休みを認めると「多くの人が不平等感を感じ、チームが乱れてしまう」。育児だけでなく、友達との飲み会も自治会役員としての地域活動も、個人には大事なイベントだ。全員が私生活を優先するために仕事を早く切り上げたり、休みを取ったりしやすくなれば、育児中の人への不満はおきにくい。

そのためにも、「ボスが率先して私生活に時間を取る姿勢を示すことが大切」という。上司が自ら動けば部下も主張しやすくなる。

もっとも主張が過ぎれば組織は回らない。仕事が残る中で「友人と飲み会」の人と「息子の急病でお迎え」の人と、どちらを優先すべきか。「誰が見ても後者だろう。でも当たり前と思っちゃいけない。後日、飲み会に行けなかった人の仕事をカバーしろよ、と早帰りする人に命じるのもボスの役割だ」という。

川島さんが部下に早帰りや有休取得を強いることはない。「どんな働き方が適しているかは人それぞれ」。遮二無二に長く働くことが良いことだと考える人がいるのも事実。川島さんはそんな時、自身の経験からこう諭す。「仕事以外に多くの経験をして、話題が豊富な人の方が仕事も円滑に進むんじゃないかな」

職場は個々の私生活を抱えた人が集まっている。子供のいる人もいない人も、男性も女性も誰もが気持ちよく働ける――。そんな職場をつくるのが、イクボスの役割だと心得ている。

イクボス7カ条

一、育児・子育てだけを、特別視するべからず

一、誰でも私生活を優先できる雰囲気を作るべし

一、ボスは自ら私生活を優先し、率先する姿勢を示すべし

一、豊かな私生活が仕事に好循環を招くと示すべし

一、制度は最低限でよい。部下に休暇・帰宅を強要するべからず

一、仕事負担の重い人が生じぬよう、声をかけ目配りすべし

一、チーム力の最大化こそが、自らの役割であると認識すべし

談笑する三井物産ロジスティクス・パートナーズの川島社長

（注）川島高之氏の話を基に作成

2014.9.18 日経新聞